國學院大學學術情報リポジトリ

種痘の普及と疱瘡

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石垣, 絵美 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001482

種痘の普及と疱瘡

石垣 絵美

論文要旨

本稿では、1849年（嘉永2）の牛痘種痘普及前後から1913年（大正2）までの法令や種痘啓蒙書の分析を通し、主に次の点を指摘する。

（1）江戸時代に流行した「痘瘡」や「疱瘡」は、牛痘種痘の普及とともに、弘化年間以降、「天行痘」、「全類痘」、「正痘」、「類痘」、「天然痘」などと呼ばれるようになった。しかし、明治以降の触れ書き等には、1326年（嘉暦元）の『万安方』における胎毒説や、1703年（元禄16）の『小兒必用養育草』における「山あげ」の残存が見られる。これは、天然痘の病因や、何度も罹患する可能性についての理解が正確でないうちに、種痘の啓蒙や制度化が始まっているため、混乱が見られたためと考えられる。

（2）1857年（安政4）に緒方洪庵が『病學通論』で説いた、病気は外来性の「刺激物」によって起こる、という考えは、1870年（明治3）3月の「種痘につき小諸藩種痘所論達」では採用されておらず、『万安方』の、体内に内在する胎毒が病因であるという考えが、伝承として残っている。したがって天然痘対処の歴史における、その理解や方法は、種痘普及と同時に一斉に切り替わるというものでは無かったと言える。

はじめに

疱瘡は8世紀前半から日本で繰り返し流行し、特に小児を死に至らしめる病気として恐れられた。近世から近代初頭にかけての疱瘡の対処法は、無事な治癒を願って用いられた「疱瘡絵」などであった。この「疱瘡絵」の図柄と文言は、江戸時代の医学書における疱瘡への理解と結びついている。

1849年（嘉永2）に長崎で牛痘種痘が成功すると、日本各地で種痘の普及が進められた。明治時代に入ると、定期的な種痘接種が法令で義務付けられた。しかし、1870年（明治3）に小諸藩から論達された資料には、「山あげ」などの江戸時代の医学書における疱瘡の症状の段階を表す言葉が残存している。また、明治中頃の資料とされる松下石人『三州奥郡産育風俗図絵』には、種痘を植えた際に竹で作った柵を座敷口に吊り下げ、その後1週間

に渡って毎日小豆飯を供え、種痘が善感した際に頂上を赤く塗り「種痘の形」にした米粉の「種痘饅頭」を、親類近所や瀬古仲間へ贈って祝う、とあり、疱瘡への対処が、種痘接種時、接種から1週間、種痘善感時に段階的に行われている。このような疱瘡への段階的な対処は、江戸時代の医学書に見られるものである。この他に疱瘡をめぐる民俗には、「疱瘡神」を祀って治癒を祈る事例などがある。以上のように、病気を神によって考える点や、近世の医学書における理解をもとに形成されている点、種痘の普及が始まると、罹病時における対処が種痘時にも応用されている点などは、疱瘡という病気への対処の特徴と言える。

本稿は、1849年（嘉永2）の牛痘種痘の導入前後から1913年（大正2）までの法令や種痘啓蒙書を主な資料とし、疱瘡に対する理解と対処のあり方を分析するものである。疱瘡は既に根絶された病気であるが、疱瘡への対処の歴史からは、科学的な治療と民俗の関係を読み取ることが可能であり、現代医療における病気を考える上でも重要な課題であるといえる。

1. 先行研究と問題点

種痘の普及と疱瘡についての主な研究には、青木歳幸他編『天然痘との闘い—九州の種痘—』（2018）⁽¹⁾があり、適塾出身者による海外の種痘書の翻訳などを資料として、大村藩、佐賀藩、長州藩、福岡藩、久留米藩、中津藩、熊本藩、薩摩藩などの九州諸藩における、種痘伝播と地域医療の近代化について検討している。本書は、佐賀藩領の好生館での組織的な種痘実施システム、中津藩領の民間医による医学館の創設、熊本の様式医学校の設立と種痘医の招聘などの、地域医療の近代化をめぐる在村蘭方医の人的ネットワークが、種痘普及に主要な役割を果たしたことを指摘している。また、本書の中で金子信二が、牛津の野田家日記にある「笹野才蔵」という疱瘡除けの呪符の記載内容の分析を行っており、また、佐賀市富士町大串上で1月28日に行われる疱瘡茶講や、唐津市鎮西町の正月の疱瘡神祭祀について触れているが⁽²⁾、この地域での種痘普及と天然痘をめぐる民俗伝承の関わりについては述べていない。

筆者はこれまでに、「病気への理解と対処—疱瘡習俗を中心に—」（2015）⁽³⁾において、渡邊平太夫政通『桑名日記』⁽⁴⁾や指田撰津正藤詮『指田日記』⁽⁵⁾などの近世の日記資料に記録されている疱瘡罹病患者への対処が、香月牛山『小兒必用養育草』⁽⁶⁾などの近世の育児書や医学書に記される症状の経過段階ごとの対処と一致することから、当時の人びとが医学書の内容と同程度の疱瘡の症状に関する知識を持ち、段階ごとに行う疱瘡関係の習俗

もこの知識に対応していることを指摘した。また、「疱瘡絵の画題と疱瘡除け」(2017)⁽⁷⁾では、疱瘡絵44点の図柄と文言の構成要素の分析を通して、①疱瘡絵を構成する図柄として見られる「富士山」は、疱瘡の症状のあわせて15日間くらいの展開過程における、3日「ほとをり」・3日「出そろひ」・3日「水うみ」・3日「山あげ」・3日「かせ」のうち、無事に「山あげ」に至ればもう安心という意味があり、富士山はその「山あげ」への祈願の意味をもち、症状の展開と快復までの道筋を示すことで人びとを安心させる効果があったこと、②疱瘡絵の構成要素の分析からは、死への恐怖感や緊迫感よりも、疱瘡の症状の変化に寄り添いながら、図柄からの連想的な力を信じて自然な治癒へ向けて祈願する、という対処の姿勢がうかがえることを指摘した。

2. 牛痘種痘法の普及

種痘の伝播経路と日本での種痘の開始については、富士川游『日本疾病史』(1969)⁽⁸⁾、富士川游『日本医学史』(1904)⁽⁹⁾、添川正夫『日本痘苗史序説』(1987)⁽¹⁰⁾が整理している。これらによると、1796年(寛政8)にイギリスのエドワード・ジェンナー(Edward Jenner)が牛痘種痘法を発見したことで、人痘に比べて飛躍的に安全性の高い牛痘苗の接種が可能となった。それ以前の日本では、患部の膿疱や治癒後にできる痂を採取し、毒性を減減させてから天然痘未感染者に人工的に接種し、弱く感染させて免疫力をつける人痘種痘法が予防に効果的であると考えられていた。

日本で初めて牛痘種痘が成功したのは、1849年(嘉永2)6月のドイツ人医師オットー・ゴットリーブ・モーニケ(Otto Gottlieb Johann Mohnike)による長崎での牛痘接種である。モーニケの牛痘苗は通訳である穎川四郎左衛門の孫にも善感し、この痘苗は1849年(嘉永2)10月16日に日野鼎哉が開設した京都の除痘館に、さらに同年11月7日には、弟の日野葛民と緒方洪庵が開設した大坂古手町の除痘館に、同年11月11日には江戸の佐賀藩医伊東玄朴に送られ、玄朴の娘とその他の幼児に接種された。このように海外からもたらされた牛痘苗は、人から人へ植え継いで分苗することで保存された。

(1) 緒方洪庵による天然痘対策

1849年(嘉永2)に大坂除痘館を開設した緒方洪庵は、牛痘種痘法の移入と普及に力を注いだ。洪庵が同年に著した『除痘館記録』⁽¹¹⁾には、除痘館の設立と展開について、次のように記されている。

抑々此館を設て都下の一ヶ所に定メ、普く諸醫を茲ニ集めて之を行ハしめんとするの趣意ハ、其良術の猥りに眩鬻の徒の手に陥らんことを恐るゝと、其佳苗の連綿して絶

ゆること勿らんことを希ふとニあり。

これによれば、除痘館設立の目的は、正確な接種と伝苗を行い、痘苗の純正な性質を維持し、厳正な管理によって保全、永続させるというものであった。こうして洪庵の除痘館設立は、西日本を中心とする牛痘種痘の普及と疱瘡予防に先駆的役割を果たした。

1845年（弘化2）頃に、洪庵に西洋の牛痘種痘の状況を伝えたと考えられる⁽¹²⁾ 米沢藩侍医堀内素堂の『幼幼精義』⁽¹³⁾には、「非以雰氣傳之以親觸其毒、而傳之、而其觸也、或直觸痘兒、或觸其毒所染百物亦傳」とあり、ここで素堂は、疱瘡の要因は「雰氣」ではなく直接その毒に触れることであるとしており、洪庵もこれを理解していたと推測できる。

洪庵はその後、1857年（安政4）に『病學通論』において「人身諸器ノ形質欠ル所ナク氣血ノ循環滯ル所ナク運営常ヲ衛ル者」⁽¹⁴⁾と述べ、「健康」な状態とは人体のもつ「生力」の発動と「刺激物」の相互作用である「抗抵」（抵抗力）のバランスがくずれていないことであると述べている。また、病気の原因となる「刺激物」には、「変常刺激物」（常態が変化することによりおこる刺激）と「異常刺激物」（外来性の病毒）があると述べている。洪庵は疱瘡の病因については述べていないが、1857年（安政4）の時点で、病気に罹患する理由を、外来の「刺激物」とそれに対抗する「生力」の力関係によって理解している。

（2）疱瘡と天然痘

「疱瘡」と「天然痘」の関係について、本稿の視点をここで提示しておく。医学上、「天然痘」は、『日本医学会医学用語辞典』⁽¹⁵⁾には、「痘瘡、大痘瘡、天然痘〔smallpox、variola、variola major〕」と、「乳痘、牛痘、小痘瘡、種痘疹〔alastrim、bovine smallpox、cowpox、minor variola、vaccinia、variola minor〕」の2項目が存在する。国立感染症研究所によると、「天然痘（smallpox）＝痘瘡（variola）」であり、「致命率が高い（20～50%）variola major と、致命率が低い（1%以下）variola minor に分けられる」とされている⁽¹⁶⁾。

疱瘡に関する史料の初見は、『続日本紀』735年（天平7）の「是歳、年頗不稔。自夏至冬、天下患豌豆瘡。俗曰裳瘡。夭死者多。」という記事で、「豌豆瘡。俗曰裳瘡。」と記されている⁽¹⁷⁾。その後、737年（天平9）6月に出された典藥寮勘文には「疱瘡治方笈」と見え、また本文の中にも「豌豆病」や「豌豆瘡」と記されている⁽¹⁸⁾。この勘文に基づいて、同年6月26日に東海道以下六道に疫病の治療法などを指示する目的で出された太宰官符の発令には、「赤斑瘡」とある⁽¹⁹⁾。その後は、『続日本紀』の790年（延暦9）に「是年秋冬、京畿男女年卅已下者、悉発豌豆瘡、俗曰裳瘡、臥疾者多。其甚者死。」⁽²⁰⁾、『文徳実録』853年（仁寿3）2月に「以穀倉院糶鹽、給京師患咆瘡者」⁽²¹⁾、『日本紀略』915年（延喜15）10月11日条に「有御藥咆瘡事」⁽²²⁾とある。931～938年（承平年間）に源順によって編

纂された『和名類聚鈔』には、「皰瘡」の項目が見られ、「唐韻云 皰防教反面瘡也 類聚國史云 仁壽二年皰瘡流行人民疫死皰瘡 此間云裳瘡」と記されている⁽²³⁾。

以上から、瘡瘡は、奈良時代から平安時代には、「豌豆瘡」「裳瘡」「瘡瘡」「豌豆病」「赤斑瘡」「皰瘡」などさまざまな名称で呼ばれていたことが分かる。ただし、これらの記事からは、具体的にどのような症状を以て瘡瘡であると断定するのか、といった内容については明らかでない⁽²⁴⁾。

江戸時代の医学書では、1703年（元禄16）に香月牛山が著した『小兒必用養育草』に、「痘瘡愈えて後、小兒をして、園の中又は庭に出て、土座にて遊ばしむべからず」⁽²⁵⁾とあり、1750年（寛延3）に橋本静話が著した『瘡瘡禁厭秘伝集』には、「瘡瘡は胎毒より発する病なり」⁽²⁶⁾とあり、1795年（寛政7）に渡充が著した『痘瘡養育』には、「瘡瘡十五日期日察之圖」⁽²⁷⁾とあり、1815年（文化12）に甲斐国市川（山梨県甲府市の南方）の医者、橋本伯寿が著した『国字断毒論』には、「痘瘡を其年の氣運、時候にて流行時疫と心得、又一生に一度にかぎるを奇妙不思儀の病なり（中略）一たび病ば天稟の毒氣おのずから尽て生涯二度病ざるなり」⁽²⁸⁾とある。1844～48年（弘化年間）に武谷祐之が著した種痘啓蒙書である『接痘瑣言』には、「天行痘」、「種人痘」、「種牛痘」とある⁽²⁹⁾。

以上から、18世紀前半から19世紀前半にかけて、「痘瘡」と「瘡瘡」という名称が混在しており、「胎毒」や「天稟の毒氣」が原因となって発症する病であると述べられている。また、1815年（文化12）の時点で、一度発症すれば二度病むことは無いという考えが見られる。弘化年間には、「天行痘」、「種人痘」、「種牛痘」という名称が現れ始める。

明治時代における「瘡瘡」や「天然痘」への理解は、後述するため簡単に述べておくと、1870年（明治3）に小諸藩種痘所によって論達された「種痘につき小諸藩種痘所論達」に、「天行痘」、「全類痘」、「正痘」、「類痘」などとあり⁽³⁰⁾、1876年（明治9）に内閣府（輪廓附）によって出された「甲第16号布達 天然痘予防規則」には、「天然痘」⁽³¹⁾とある。しかし1898年（明治31）の「學校傳染病豫防及消毒方法（文部省令第20號）」には、「痘瘡及假痘」⁽³²⁾とあり、「痘瘡」という名称がここでも見られる。

以上、明治時代の種痘を啓蒙する論達や、行政から出された法令には、「天行痘」、「全類痘」、「正痘」、「類痘」、「天然痘」、「痘瘡」、「假痘」などの名称が混在している。ここから、江戸時代に「痘瘡」や「瘡瘡」と呼ばれていた病が、種痘の普及とともに、弘化年間頃から「天行痘」、「種人痘」、「種牛痘」、「天然痘」という名称で呼ばれ始めていること、また「正痘」と「類痘」の2種類に区別されていることが分かる。しかし「天然痘」の病因や、何度も罹患する可能性についての理解が正確でないうちに、種痘の啓蒙や制度化が始まっているため、江戸時代における名称や理解の残存が見られる。

以上の点から、本稿では、生活用語として「疱瘡」という語を用い、この「疱瘡」を医学用語の「天然痘、痘瘡」と同一とは見なさないことにしておく。

3. 疱瘡対策の制度化

(1) 種痘の義務付け

明治時代に入ると、法令により種痘の義務付けが進められた。1868年（明治元）8月15日に「鎮将府種痘所ヲ東京ニ設ク」⁽³³⁾ や、「旧幕府ノ医学館ヲ以テ種痘所トナシ之ヲ医学所ニ附ス」⁽³⁴⁾ が発令され、1869年（明治2）6月22日には、東京府から「府下ニ種痘所ヲ設ケ種痘ヲ施行ス」⁽³⁵⁾ が布達され、東京を始めとした各地に種痘所が設立された。1870年（明治3）3月に、大学東校から「大学東校種痘館規則を定ム」⁽³⁶⁾ が発令され各府藩県に布達されたことにより、大学東校に種痘館が設けられ、種痘者名簿や種痘証明書の提出が義務付けられた。同年3月28日に東京府から、「種痘所町々増置医員出張種痘施行」⁽³⁷⁾ が発令され、種痘所の増置が行われた。

種痘の義務付けが進むと共に、疱瘡への理解にも変化が見られ始めた。1870年（明治3）3月に長野県で出された「種痘につき小諸藩種痘所論達」⁽³⁸⁾ には次のように述べられている。

近来一般流行せし発し者は全類痘なる者にて決て正痘ニ非ス、然ルを私に再痘ト唱へ疑咸ヲ生し種牛痘無益の事など心得違ひの者略是あり、斯如ク疑念より種牛痘ヲせされバ後日天行痘ヲ患ルハ必然の事にて、殊更難疹嬰り死亡に及至テハ徒々後悔及はさる而已ならず、且つ先君之厚志ヲ滅至る因て正痘類痘之別テヲ左ニ示ス、

一正痘ハ其父母ノ胎内より毒ヲ受来り生涯ニ一度ハ発する者ニテ、初め三日序熱トテ大熱アリ、四日めより六日めを報痘とて追々相発し、七日めより九日めヲ起脹トテ山ヲあげ、十日目より十二日めヲ灌膿シテ尽白膿ヲもつ、十三日より十五日めを収靨とてかせかゝり、十六日めより十八日めに落痂して痂をつくるなり、是則正痘ノ日数ニテ少シの遅シ速シハあれとも決シテ違ふ事なし、悪痘に至ラハ死亡モ甚々多シ日数ハ尚更延りたる事なし、

一類痘トテ序熱兩三日ハ正痘に疑きほとの大熱出れとも発すれば、熱もさめ心気ヲ快ク飲食モ常ニ異ウス起脹方一度ニ発セス、始ニ発せし方より七日八日めニハ追々落痂又其中ニ発するもあり発し方モ至テふ齋ニテ十二日マテニハ大方落痂ルなり、縦令多分ニ発するとも死亡ニ及者なり、且種牛痘の者に限らず未タ種牛痘せさる者ニモ発し発シテ后天行痘を患ふる者モあれば正痘に非さる事あきらかなり、

前件ヲ能ク弁レハ正痘ト類痘の差別ハ分明事なれば、種牛痘の者ハ仮令一粒にても鑑定メ済の上ハ決して再痘の患なし、万一再痘の者あらハ兼テ渡シ置し功成札を持出へく速_ニ真偽ヲ分ツ申へき事なり、

ここには、「近来一般流行せし発し者は全類痘なる者にて決して正痘ニ非ス」とあり、近来一般に流行しているものは、「全類痘」であって、「正痘」では無い、とされている。そして、「種牛痘ヲせされバ後日天行痘ヲ患ルハ必然の事」とあり、牛痘を接種しなければ「全類痘」の罹患経験があっても、後日「天行痘」に罹患する可能性がある、とされている。

その「正痘」と「類痘」、「全類痘」の区別について述べる中で、「正痘ハ其父母ノ胎内より毒ヲ受来り生涯_ニ一度ハ発する者_ニテ」とされており、「正痘」が母親の胎内の毒によって発症するものであるとされている。この胎内の毒が天然痘の発症要因であるとする説は、1326年（嘉暦元）に梶原性全が宋の医書の説を引用して著した『万安方』⁽³⁹⁾の中に既に見られ、ここで梶原性全は、天然痘の原因は小児が胎内にある時に母親から受けた毒にあり、この胎毒と気象的因子とが相乗作用して、痘瘡を生ずると説明している。緒方洪庵が、1857年（安政4）の時点で『病學通論』で説いた、外来の「刺激物」とそれに対抗する「生力」の力関係による理解は、ここには反映されていない。このように、種痘による天然痘の予防は、洪庵の言う「刺激物」の接種による予防法であるにもかかわらず、1870年（明治3）3月の小諸藩における天然痘の知識は、従来からの論理に留まっていたのが分かる。

また、「種痘につき小諸藩種痘所論達」には、「初め三日序熱」、「七日めより九日めヲ起脹トテ山ヲあげ」、「十日目より十二日めヲ灌膿シテ」、「十三日より十五日めを収靨」、「十六日めより十八日めに落痂」とあり、「正痘」に罹病した後の症状の経過を、序熱、起脹、灌膿、収靨、落痂の5段階で説明しており、またその中に「山ヲあげ」という言葉が見られる。これは1703年（元禄16）に香月牛山が著した『小兒必用養育草』⁽⁴⁰⁾の内容の一部一致している。

熱蒸とて、三日あり、和俗ほとをりといひ、又は序熱といふなり、

放標とて、三日あり、和俗出そろひといふなり、

起脹とて、三日あり、和俗水うみといふなり、

貫膿とて、三日あり、和俗山あげといふなり、

収靨とて、三日あり、和俗かせといふなり、

牛山はここで、「山あげ」は疱瘡発症から最終段階までの15日間のうち、10日目から12日目の期間を指す言葉として用いており、疱瘡罹病患者の生死を決める時期は、発症から6日目か9日目或は11日目か14日目であるとし、重い疱瘡に罹病した場合には、「山あげ」という「成就」をすることなく死ぬと述べられている。したがって、「山あげ」は患者の

生死を決める重要な段階であると認識されていたことが分かる。「種痘につき小諸藩種痘所論達」における「山ヲあげ」は、発症から7日目～9日目を指しており、発症からの時期が『小兒必用養育草』と異なるが、同様の表現が見られるという点は指摘できる。このように、1703年（元禄16）の対処法が1870年（明治3）の小諸藩の触れ書きに見られることから、明治初期の疱瘡に対する理解に、18世紀初期の知識の残存が見られることが指摘できる。

小諸藩の論達を始めとし、1870年代以降の法令では、天然痘の予防における再三の種痘接種の必要性が繰り返し呼びかけられている。1874年（明治7）10月30日文部省布達の「種痘規則（文部省布達第27号）」には、「小兒出生七十日より満一迄を種痘の善期とす爾後七年毎に必再三接種して天然痘を預防し且前効の存否を檢すべし」⁽⁴¹⁾とあり、出生してから70日～満1年までを種痘の善期とし、7年ごとに種痘を繰り返し接種することで天然痘の予防が可能になるとされ、再三の種痘接種が呼びかけられている。

その後1876年（明治9）5月18日に内閣府（輪廓附）から「甲第16号布達 天然痘予防規則」⁽⁴²⁾が出されており、それは次のような内容である。

第一條 小兒初生七十日ヨリ満一年迄ノ間ニ必ス種痘スヘシ若シ事故アリテ此期ニ後ル、モノハ其次次第ヲ醫務取締若クハ區戸長ニ届クヘシ但初種ノ後五年或ハ七年毎ニ再三種ヲ試ムヘシ

第二條 種痘シタル者ハ必ス其種痘醫ヨリ種痘済ノ證書ヲ請ケ取り置クヘシ但天然痘變痘ニ感シタルモノモ本文ニ準シテ醫師ノ證書ヲ請ケ取り置ク可シ

第三條 醫務取締若クハ區戸長ハ初種ノモノ再三種ノモノ及ヒ事故アリテ種痘スルコト能ハサルモノ等夫々檢査シ地方廊ニ届ケ出ツヘシ

第四條 地方廊ニ於テハ醫務取締若シクハ區戸長ノ届書ヲ以テ半ヶ年分ツ、取經メ毎年三月九月内務省ニ出ス可シ

ここでは、出生から70日～満1年に種痘接種しなかった者は、医務取締もしくは区戸長に届け出ること、種痘接種が済んだ者は、種痘医から種痘済の証書を受け取り保管することが義務付けられている。また、医務取締もしくは区戸長は、初種、再三種、まだ種痘接種していない者を地方廊に届け出ることが義務付けられている。このように、種痘証書の届け出を義務付け、医師と区戸長、地方廊、内務省が連携してその情報を把握することで、国民の種痘実施を管理し、再三の種痘接種によって天然痘の予防を徹底して行っている。

さらに、1898年（明治31）9月28日「學校傳染病豫防及消毒方法（文部省令第20號）」⁽⁴³⁾には、学校における伝染病予防について次のように書かれている。

第一條 學校ニ於テ特ニ預防スヘキ傳染病ノ種類左ノ如シ

第一類 甲 痘瘡及假痘、實布垚里亞、猩紅熱、發疹瘰扶私

乙 百日咳、麻疹、流行性感冒、流行性耳下腺炎、風疹、水痘、肺結核、癩病、

第二類 赤痢、虎列刺、腸瘰扶斯、

第三類 傳染性皮膚病、傳染性眼炎、

第二條 第一條第一類甲又ハ第二類ノ傳染病ニ罹リタル職員生徒等ハ昇校スルコトヲ得ス前項ノ職員生徒等其傳染病治癒シタル後昇校セントスルトキハ先ツ全身浴ヲ行ヒテ衣類ヲ改メ且ツ醫師ニ於テ傳染ノ虞ナキコトヲ證明スルヲ要ス

第三條 第一條第一類甲又ハ第二類ノ傳染病ニ罹リタル職員生徒等ハ其病況ニ依リ醫師ニ於テ適當ノ處置ヲ施シ傳染ノ虞ナキコトヲ證明シタルモノニアラサレハ昇校スルコトヲ得ス

ここでは、学校において予防すべき伝染病として、天然痘があげられており、天然痘に罹患した職員生徒は登校を禁じられており、また天然痘治癒後も全身浴と衣類の交換、医師の証明が必要であるとしている。このように学校教育においても、天然痘予防の徹底化が図られていたことが分かる。

1909年（明治42）4月に公布された「法律第35號改正種痘法」⁽⁴⁴⁾には、「第一期 出生ヨリ翌年六月ニ至ル間但シ不善感ナルトキハ翌年六月ニ至ル間ニ於テ更ニ種痘ヲ行フヘシ 第二期數ヘ歳十歳但シ不善感ナルトキハ翌年十二月ニ至ル間ニ於テ更ニ種痘ヲ行フヘシ」とあり、種痘接種の時期を、第一期（出生から翌年6月まで）と第二期（数え歳10歳）の2回に定めている。

このように、19世紀後半から20世紀初頭にかけて、再三の種痘接種の義務付けと、国民の種痘接種状況の管理によって、天然痘の予防がより確実なものとなった。

以上のように、19世紀の天然痘に関する知識は、自然発症する天然痘に罹患した者は再び天然痘を発症することはないという誤った認識から、自然発症する「天行痘」では免疫が正常に定着せず、牛痘種痘を繰り返し接種することによる「正痘」が必要である、という認識へと変化している。しかしその一方で、牛痘種痘の接種が定着するまでの人々の理解には、14世紀や18世紀における「胎毒」を病因とする説や、「山あげ」などの古い要素も見られる。1870年（明治3）3月の「種痘につき小諸藩種痘所論達」における天然痘の病因論は、胎毒と気象的因子の相乗作用によって考えられており、緒方洪庵が1857年（安政4）の時点で考えていた、外来性の「刺激物」によって起こるとする病因論とは矛盾している。

(2) 種痘の啓蒙

1844～48年（弘化年間）に武谷祐之が著した種痘啓蒙書である『接痘瑣言』には、「種牛痘」、「天行痘」という言葉が見られ、ここでは「人痘種人痘法及種牛痘法ノ効用比較」と題され、「天行痘」、「種人痘」、「種牛痘」の3つが区別されている。ここで「天行痘」とは自然感染の天然痘のことを指し、「種人痘」とは人痘接種による天然痘、「種牛痘」とは牛痘種痘接種による天然痘を指している⁽⁴⁵⁾。『接痘瑣言』には「天行痘」、「種人痘」、「種牛痘」の徴候、死亡者数、危険の度合い、膿潰、時日費価、注意、救療、畸醜、余患がそれぞれ示されており、危険度は「天行痘」が「三分ノ一ハ危険」とされ、「種人痘」が「三十人或ハ四十人ノ中危険ノモノアリ」とされ、「種牛痘」が「一人モ危険アルコトナシ」とされており、種牛痘の危険性が最も低く、有効な予防法であることを強調している。

1875年（明治8）には、長野県において、明治8年1月に筑摩県医覺兼病院長によって「明治8年1月種痘説論につき筑摩県医覺兼病院長新聞投書」⁽⁴⁶⁾という新聞投書が投稿されており、種痘について次のように述べられている。

余熟其惑ヲ生スルノ因ヲ原ヌルニ他ナシ間再感スル者アルヲ以テナリ、今其惑弁解スルカ為ニ再感ノ理ヲ説シ以テ世人ニ揭示ス、蓋シ再感ニ三種ノ別アリ、

其一 既ニ種痘スルノ人天然痘一般流行ノ時ニ方テ痘状ノ瘡ヲ発スル者間之レアリ、然モ其発スルノ後経過必ス順序ヲ追ハズ速ニ収醫シ其癍痕ヲモ胎サズ固リ生命ノ憂ナシ、是種痘ノ後猶余毒アリ流行ノ時氣ニ感シテ之ヲ発散シ尽ス者ナリ、真ノ再感ニハ非ルナリ、決シテ挂念ス可カラズ、素牛痘ヲ取テ人体ニ種ルノ故ヲ以テ或ハ比弊ナキヲ得ザルナリ、若シ之ヲ人ニ取テ人ニ種レバ則同性善感スルガ故ニ身体一般之ヲ発シ病ノ軽重固リ図ル可カラズ、或ハ之ヲ促シメ人ヲ殺スニ至ル甚タ怖ベキナリ、是即牛痘種接ノ發明世ニ洪益アル所以ナリ、

其二 種痘既了リ更ニ天然痘ニ嬰ル者亦或ハ之アリ、是其嘗テ種痘スルノ時医ノ診決ヲ請ズ俗人謾ニ自ラ断シメ佳トナシ或ハ医ノ真偽ヲ診認スル事疎漏ニシメ鑑定ヲ誤ルニ坐スルナリ、此故ニ種痘スル者ハ医俗共ニ懇切診視シ以テ鑑ヲ誤ル事無カル可シ、此ヲ緊要ノ事件トナス、

其三 嘗テ種痘スルノ時善感ヲ得テ医俗共ニ謹慎鑑定シ以テ真痘トナスモ千百ノ人員更ニ天然痘ニ罹ル者偶之ヲ見ル、是其嘗テ種ルノ痘苗稀薄ニシテ力其毒ヲ一掃スルニ足ラズ若クハ其人ノ性所謂異性稟賦ニシテ感受ノ機能モ亦一異性ヲナスナリ、洋医或ハ曰ク年ヲ経ル久シケレバ則種痘ノ力絶テ又天然流行ノ時氣ニ感ズト、未ダ孰カ是ナルヲ知ラズ、此故ニ一たび種痘ヲ行フ人ト雖モ尚再三之ヲ種接シ後患ヲ預防セザル可カラズ、再三之ヲ試テ感受セス、而ル後始メテ泰然トシテ後患ノ至ルナキヲ期ス可

シ、

ここでは、種痘を接種した後に再び天然痘に罹患する「再感」とよばれるケースには3種類あるとされており、第1は、既に種痘を接種した者が天然痘流行時に再び発症する場合で、種痘をした際体内に残った毒が流行の気を感じて発散するもの。第2は、種痘接種の際に医師が仮痘を真痘であると誤って判断し再感したもの。第3は、種痘接種の際に真痘と判断されたが、痘苗の不全などにより十分な効果が得られなかったもので、この第3のケースは極めて稀であるとされている。ここでは正常に免疫がついた状態を「真痘」、そうでない場合を「仮痘」としている。このように、種痘を接種しても再感する場合がいくつもあり、先に述べたように、再三の種痘接種が万全な天然痘予防に有効であるとされている。

1875年(明治8)11月には、クレンケ・ハルトマン『母親の心得』の翻訳書が出され、そのうち「小兒種痘の事」⁽⁴⁷⁾には、次のようなことが書かれている。

初生兒にハ必種痘を施すべし母たるものハ皆この天然痘を防禦すべき種痘の功用、濫觴并に其理合ハ既ニ能く知れることなればこれを他書に譲りて爰にハ只種痘(牛痘)の施行のみを論説す

今時各國の中にて種痘強促法を施行する者過半数なり或ハ學校に入り又ハ他の諸事に係りても皆必其地方の種痘済の證書を所持せずばならざることとす種痘ハ小兒の生まれてより六ヶ月の間に施行すべし縦令遅くとも二ヶ年を過ぐべからず尤も病氣の時に種痘を行ふの害あり

種痘ハ初め牛痘をとりて人間に感染せしめ、それより次第に人々相移して天然痘の預防とせりこの法ハ英國に起りて近時各國に傳播す近頃までハ一回種痘すれば生涯天然痘に感ずる患なしとせしが豈圖らん充分種痘の済みさる小兒の天然痘に再感し且一回種痘し者の中にて十年を経或ハ十五年廿年を経て再感する者あるを實驗せしより一回種痘するとも亦漸く數年を経れば天然痘に感ずべきことあるを推し知りて再回の種痘を施すこととなり遂に嚴く再種痘を施行せしむる國多きに至れり、されば五年目或ハ七年目に再び種痘するを良とするなり

(中略)

種痘ハ能く感すれば四日の後には漸く焮衝して赤くなり既に五日を経れば半球形の如く高くなり又其頂上少しく窪みて透明なる水膿を含みそれより次第に大きくなり八日に至りて全く熟し乳汁の如き青白き本膿となるなり小兒ハ解膿なるまでハ多少の苦痛を覺え寒熱を起すことあり且感じ深き性質の小兒ハ是が為に頭痛嘔吐などを苦しむものもあるなり既に十日目に至りてハ痘瘡の中央より次第に赤黒き瘡殻を生じ廿日を過

くれバ自ら脱し去るなり

此聞ハ食物に心を用ゐるその寒熱強き時ハ乳の分量を減じ稍成長せるものにハ清潔の飲物を與へ室内、衣服并に寢床とも温かに過ぐるはなし七日或は八日の後他人に種痘するが為に膿をとらるるものを其痘瘡の上より棉花を以て温包し衣服の為に破傷せざるようよく防ぐべし痘瘡ハ人命をも害すべき程の危き病なるにこれを預防する種痘の發明ありしハ人生の幸福と言ふべし

(中略)

近世種痘ハ人より人に傳植する際に或ハ他の悪しき病をも共に傳染するといふ説の起りしより遂に英國政府ハ議院の決議によりて歐州各國の醫士に令し種痘の可否を討論せしめしに種々の論説ありしかども到底種痘を可とする者多かりき、さねども種痘するにハ膿種を吟味せざるべからず牛痘も人より人に漸く移しゆけバ其性質終に鈍くなるを以て再びこれをハ犢に移し更に新鮮の痘膿をとりて傳植すべし且その種膿をとるにハ病兒ハ勿論其兒の父母も必しも悪しき病なき者に限るべし天然の痘瘡を預防せば必亦他の病を引起すことなりとの説ハ全く無稽の妄説にして信するには足らざるなり
ここでは、初生兒の生後6ヶ月以内の種痘接種を義務付けており、また学校に入学する際、或は他の諸事においても必ずその地方の種痘済みの証書を所持することを義務付けている。一度目の種痘から10年或は15年、20年後に再感する可能性があるため、5年目或は7年目に二度目の種痘接種を勧めている。また、天然痘を予防するために種痘をする際に他の病も伝染するという説は根拠のない説であると否定し、種痘の有効性を啓蒙している。

以上のように、19世紀の種痘啓蒙書は、天然痘を予防するために種痘をする際に他の病も伝染するという説は根拠のない説であると否定し、種牛痘の危険性が最も低く、有効で安全な予防法であることを強調している。また、種痘を接種しても再感する場合がいくつもあり、再三の種痘接種が万全な天然痘予防に有効であるとしている。

4. 種痘体験者の語りから

19世紀の法令や啓蒙書においては、牛痘種痘法が天然痘予防にとって最も有効な手段であると認識されている。また、法令上は医師と区戸長、地方廊、内務省が連携して種痘を実施しているとされているが、ここから各地の種痘接種の実態を知ることはできない。筆者が種痘経験者の語りから得た、当時の種痘に関する事例として、次のようなものがあげられる。

〔事例1〕群馬県神流町浦川町区日名地組⁽⁴⁸⁾

ホウソウの種痘は学校でした。小学校に上がってから4カ所した。

〔事例2〕群馬県神流町船子地区⁽⁴⁹⁾

当時船子には医者がおらず、万場のSさんという医者しかいなかったなのでそこに行って種痘を受けた。話者が疱瘡を植えたのは小学校3年生（8歳）になってからで、疱瘡を植えると話者の父親が御飯（白い米）を炊いてくれた。具合が悪くなると体を冷やしてくれたりお粥を煮てくれた。2、3日寝ていると真っ赤になってカサブタになった。寝ていればすぐに治った。

〔事例3〕群馬県神流町塩沢地区⁽⁵⁰⁾

万場のお医者さんで天然痘の種痘を受けた。塩沢に医療機関はない。

以上3つの事例から、群馬県神流町には当時種痘所や種痘を受ける医療機関は無かったため、学校や、万場地区の開業医に依頼して種痘を受けていたことや、種痘の接種時期は小学校低学年であったことが分かる。

高木誠一「疱瘡神のこと」には、1927年（昭和2）3月19日に福島県石城郡草野村北神谷で疱瘡が流行した際の、種痘所における高木の聞き書き調査の結果が示されている⁽⁵¹⁾。ここでは、「御柳ばやし」や「モ流しの祝」と呼ばれる疱瘡安全を願った祈祷についての聞き書きが紹介されており、「1862年8月にモ流しの祝をしたのが村では最後で、それ以後は追々種痘が行われ始めて、祝をしなくなった」とあるが、ここから1927年（昭和2）の時点で福島県石城郡草野村北神谷では天然痘の流行がまだ見られたこと、天然痘が流行した年に種痘所において種痘接種が行われていたことが分かる。

種痘の普及により、天然痘をめぐる民俗伝承は不要となったかにみえた。しかし、最近まで疱瘡への対処を継続して行っていた地域がある。次のような1915年（大正4）と、1928年（昭和3）の事例や、筆者の現地調査による事例がそれにあたる。

〔事例4〕静岡県小笠郡横須賀町⁽⁵²⁾

初めて種痘をした子どものある家では、神棚の前か床の間に赤い紙を敷き、赤い煎餅菓子や赤飯を供え、花瓶には椎の木を進せて疱瘡神を祭る風がある。近來は大分廃れたが物堅い家では今も昔のしきたりを守っている。この日は御湯掛けと云って種痘した小児を箕の中に入れ、蒸籠の簾をその頭に載せ、男親の日常使っている茶碗に、イグラ（もぐら）の持ち上げた土と、鼠の糞3粒と熱湯を入れ、その湯を笹の葉で子供にかける。湯かけをせぬと天然痘を遣ると云っている。

〔事例5〕静岡県沼津市大平地区字新城⁽⁵³⁾

話者が子どもの頃（1940～1950年代）に、子どもが種痘を受けるとすぐ「ホウソウがついた」と云って、種痘後子どものホウソウが軽く済んでほしいという親や家族の願いが込め

て、たくさん作り、家族で食べたり親戚や近所に配ったりしたホウソウ団子（白い中に餡の入った子どもの握りこぶしぐらいの大きさで、食紅でてんこに赤い印をつける）を、孫がインフルエンザの予防接種をした際も買ってきて食べたという。

〔事例6〕静岡県三島市広小路町⁽⁵⁴⁾

種痘がついたら（じゅくじゅくしたら）小麦饅頭を母親が作ってくれて食べる。また、近所に配る。半分食べたら半分しか効かない。

〔事例7〕群馬県神流町浦川町区本町組⁽⁵⁵⁾

学校で2歳のときと学校に入る前の2回、4カ所か6ヶ所種痘してもらった。種痘を行った場所は学校と円光寺の庭であった。種痘を受けてくると、麦わらを編んで簀の子状にしたものに果物や野菜を入れ、四隅を吊って近所の山の木にかけてホウソウが良くつくようにホウソウサマにお祈りした。

〔事例8〕広島県広島市⁽⁵⁶⁾

種痘後12日目、棧俵の上に赤飯と大根なますとを土器に盛り供え、赤い紙の御幣を立て、一銭銅貨をそえて四つ辻へ持っていく。これが疱瘡神を機嫌よく他方においやる方便である。それと同時に、酒と塩とを混じた米の磨ぎ水の湯で、種痘した腕を洗った汚れ水を、器物に入れて携え行き、同じ四つ辻の供物の前に振りまき、振りまくや否や後ろを見ずに帰ってくる。そうして疱瘡神をよそに送ってしまえば豆大に腫れていた痘瘡が、次第にトウモロコシの黒焼きみたようにかせて来るといふ。

事例数は少ないが、これらの種痘体験者の語りから、次のことが指摘できる。群馬県神流町では、種痘所や種痘を受ける医療機関などの施設は整っておらず、学校や地域の開業医に依頼して種痘を受けていたことや、種痘の接種時期は小学校低学年であったことが分かる。また、1927年（昭和2）の時点で福島県石城郡草野村北神谷では天然痘の流行がまだ見られたこと、天然痘が流行した年に種痘所において種痘接種が行なわれていたことが分かる。

また種痘が既に実施されていたと思われる1915年（大正4）や1928年（昭和3）の静岡県東部や群馬県、広島県では、天然痘罹病時から種痘接種時、そしてインフルエンザの予防接種時へと、疱瘡への対処を行う時期が変化しており、また〔事例5〕は、種痘による免疫の定着を意識している点で、種痘普及後にその目的が変化した事例と言える。しかし疱瘡神に供物を供えて祈願する、疱瘡神を外部へ送り出す、患部を洗い流す、などの行為は種痘普及以前から変化しておらず、近代的な知識が普及しながらも、天然痘罹病時と同様の理解のもとで疱瘡への対処が継続されていたことが分かる。

おわりに

ここまでの論点をまとめると、以下の点が指摘できる。

1703年（元禄16）～1815年（文化12）の時点で、「痘瘡」や「疱瘡」と呼ばれ、「胎毒」によって、一生に一度罹病するとされた病は、牛痘種痘の普及が始まる1844～48年（弘化年間）頃から「天行痘」、「全類痘」、「正痘」、「類痘」などと呼ばれるようになった。しかし、1870年（明治3）3月の「種痘につき小諸藩種痘所論達」には、1326年（嘉暦元）の『万安方』における胎内の毒による説や、1703年（元禄16）の『小児必用養育草』における「山あげ」の残存が見られる。これは、「天然痘」の病因や、何度も罹患する可能性についての理解が正確でないうちに、種痘の啓蒙や制度化が始まっているためであると考えられる。

1857年（安政4）の時点で、緒方洪庵は『病學通論』において、病気は外来性の「刺激物」によって起こる、と考えていた。しかし、1870年（明治3）3月の「種痘につき小諸藩種痘所論達」は、天然痘の原因を胎毒と気象的因子の相乗作用によって考えており、緒方洪庵の考えは採用されていない。したがって、1870年（明治3）の時点で1326年（嘉暦元）の『万安方』における古い考えが伝承として残っており、天然痘対処の歴史において、その理解や方法は、種痘普及と同時に一斉に切り替わるというものでは無かったと言える。

1915年（大正4）や1928年（昭和3）の静岡県東部、群馬県、広島県では、疱瘡神に供物を供えて祈願する、疱瘡神を外部へ送り出す、患部を洗い流す、などの民俗が見られ、疱瘡罹病時に行われていた対処が、種痘時、インフルエンザの予防接種時にも行われている。疱瘡罹病時の対処法が種痘の普及と共に種痘接種時に行われるようになり、ある段階から、疱瘡という病はリアリティを失い、インフルエンザの予防接種時に疱瘡への対処を行うようになったと考えられる。

本研究の意義は、牛痘種痘の普及した1849年（嘉永2）年以降の、1870年（明治3）「種痘につき小諸藩種痘所論達」などに、1326年（嘉暦元）『万安方』の胎毒説や、1703年（元禄16）香月牛山の『小児必用養育草』の「山あげ」と同様の考えが見られることなどから、疱瘡、痘瘡、天行痘等と呼ばれる病への理解や対処は、疱瘡流行の長い歴史の中で発生した理解が引きずられていることが指摘出来た点と、以前から伝承されていた疱瘡罹病時の民俗は、種痘時、インフルエンザのワクチン接種時に導入されており、民俗は場所を変えても伝承される点を指摘できた点にある。

今後の課題として、長い流行の歴史の中で、経験によって対処されてきた疱瘡に対し、1858年（安政5）頃から突如流行し始めた、未知の病であるコレラに対する医療や民俗の

あり方が、天然痘とどのように異なるのかを検討していきたい。

註

- (1) 青木歳幸・大島明秀・W・ミヒエル『天然痘との闘い—九州の種痘—』2018、岩田書院
- (2) 金子信二「佐賀の疱瘡神」青木歳幸・大島明秀・W・ミヒエル『天然痘との闘い—九州の種痘—』2018、岩田書院
- (3) 「病気への理解と対処—疱瘡習俗を中心に—」『伝承文化研究』第13号、2015、國學院大學伝承文化学会、p.41～p.52
- (4) 渡邊平太夫政通『桑名日記』天保10（1839）～嘉永元（1848）（谷川健一『日本庶民生活史料集成』第15巻、1971、三一書房）
- (5) 『指田日記』は、武蔵国多摩郡中藤村（現東京都武蔵村山市）の陰陽師、指田撰津正藤詮によって、天保5（1834）～明治4（1871）にかけて著された日記である。（武蔵村山市立歴史民俗資料館『注解指田日記上巻』2005、武蔵村山市教育委員会、武蔵村山市立歴史民俗資料館『注解指田日記下巻』2006、武蔵村山市教育委員会）
- (6) 香月牛山『小兒必用養育草』1703（黒川眞道・小瀧淳校、同文館編集部編纂、香月牛山著『日本教育文庫 衛生及遊戯篇 小兒必用養育草』1911、同文館）
- (7) 「疱瘡絵の画題と疱瘡除け」『國學院雑誌』第118巻7号、2017、p.104～p.113
- (8) 富士川游『日本疾病史』1969、東洋文庫
- (9) 富士川游『日本医学史』1904、裳華房
- (10) 添川正夫『日本痘苗史序説』1987、近代出版
- (11) 緒方洪庵『除痘館記録』1849（緒方洪庵記念財団除痘館記録資料室『緒方洪庵の「除痘館記録」を読み解く』2015、思文閣出版）
- (12) 『幼幼精義』には、ロンドンには痘院があり種牛痘院が付属して、毎年十万人余人に種痘している、といった内容が書かれており、既に西洋先進国では牛痘種痘法が実施されているのに以前として日本では危険性の高い人痘種痘法を行なわざるを得ない現状を嘆いていた洪庵は、本著に影響を受けたと考えられる。（梅溪昇『緒方洪庵』2016、吉川弘文館、p.155～157）
- (13) 堀内素堂訳『幼幼精義』1845年頃（『人間形成と社会—学校・地域・職業』第I期学校方式の受容の諸相 第1巻学校方式導入以前の人間形成、2012、クレス出版）
- (14) 緒方洪庵訳『病學通論』1857（国立国会図書館）
- (15) 『日本医学会医学用語辞典』によると、日本語と英語の対応関係は、「痘瘡 (variola, smallpox)」、「大痘瘡 (variola major)」、「天然痘 (variola major, variola, smallpox)」、「乳痘 (bovine smallpox, alastrim)」

- 「牛痘 (cowpox, bovine smallpox, alastrim)」、 「小痘瘡 (variola minor, bovine smallpox, alastrim)」、 「種痘瘡 (vaccinia)」 となっている。(日本医師学会、医学用語辞典 WEB 版 <http://jams.med.or.jp/dic/mdic.html>)
- (16) 国立感染症研究所 (http://idsc.nih.go.jp/idwr/kansen/k01_g3/k01_40/k01_40.html)
- (17) 『続日本紀』 天平 7 年 是歳条
- (18) 『朝野群載』 天平 9 年 6 月 典藥寮勘文
- (19) 『類聚符宣抄』 天平 9 年 6 月 26 日 太政官符
- (20) 『続日本紀』 延暦 9 年 是歳条
- (21) 『文徳実録』 仁寿 3 年 2 月 是月条
- (22) 『日本紀略』 延喜 15 年 10 月 11 日条
- (23) 源順『和名類聚鈔』(正宗敦夫編『和名類聚鈔』1977、風間書房)
- (24) 富士川游 (1969) は、「赤斑瘡の名称は、天平九年の官符に見えたるを始めとし、後の世に至りて、「百鍊抄」等の諸書にも見えたり。但し、その中には痘瘡にあらずして、たとえば『日本紀略』長徳四年の疫瘡を赤斑瘡とするがごとく、正しく麻疹と認むべきものあり。鎌倉時代、梶原性全の「万安方」に、(中略) 赤斑瘡は傷寒発斑又は麻疹の異称なるを、痘瘡とするは非なりと言うを見れば、赤斑瘡の名称は正しくこれを用うれば、麻疹に限るべきものなれども、実際にありて、この呼称はこの時まで間々痘瘡にも用いられたることを知るべし。」と述べている。また、『続日本紀』の補注は、「天平九年の疫病が麻疹であるならば、勘文が瘡瘡の治方を言うのは矛盾」であるため、「天平九年の疫病も天然痘と見てよいであろう」と述べている。(富士川游『日本疾病史』1969、平凡社)
- (25) (6)
- (26) 橋本静話『痘瘡禁厭秘伝集』享和 3 (1803) (雅俗の会編『中野三敏先生古稀記念資料集、雅俗文叢』2005、汲古書院)
- (27) 渡充『痘瘡養育』寛政 7 (1795)、国立国会図書館蔵
- (28) 橋本伯寿『国字断毒論』文化 7 (1810) (森嘉兵衛、谷川健一編『日本庶民生活史料集成』第 7 卷 飢饉、悪疫、1970、三一書房)
- (29) 武谷祐之『接痘瑣言』1844~48 年 (弘化年間) 成立、武谷道彦氏蔵 (慶應義塾大学信濃町メディアセンター富士川文庫)
- (30) 「種痘につき小諸藩種痘所論達」1870『長野県史 近代史料編』第 8 卷 (2) 社会衛生・防災、1987、長野県史刊行会、『御用書留帳 藤原田村役元 明治四年』小県郡丸子町藤原田 堀内一夫氏所蔵
- (31) 内閣官報局『法令全書明治 9 年』第九卷、1975、原書房、p469~470
- (32) 岩手縣師範學校『岩手県師範学校一覽』1913、p148~150

(68)

(33) 『太政類典』 1 編118巻 (国立国会図書館)

(34) 『太政類典』 1 編19巻 (国立国会図書館)

(35) 『太政類典』 1 編81巻 (国立国会図書館)

(36) 『太政類典』 1 編81巻 (国立国会図書館)

(37) 『法令類纂』 1 編 (国立国会図書館)

(38) (30)

(39) 梶原性全『万安方』1326年(嘉暦元)(1986、科学書院)

(40) (6)

(41) 長尾景弼編纂『官省規則全書従第六篇至第十篇』第7編、1874、博聞社

(42) 内閣官報局『法令全書明治9年』第9巻、1975、原書房、p469~470

(43) (32)

(44) 佐々木英光『医事法令全集』1909、中央法律學館、p106~116

(45) (29)

(46) (30) (『信飛新聞復刻版』明治8年2月7日より)

(47) クレンケ・ハルトマン著、近藤鎮三訳「小兒種痘のこと」『母親の心得』上、1875

(48) 話者：1923年10月10日生まれ、2013年筆者調査

(49) 話者：1923年5月7日生まれ、2013年筆者調査

(50) 話者：1931年生まれ、2013年筆者調査

(51) 高木誠一「疱瘡神のこと」『民族』第3巻第5号民族発行所1928年7月1日には、「子どもが疱瘡に罹ると、デイ(座敷)の正面に笹のある青竹を四方結んで神棚を作り、赤い幣束を7本立て、供物を供え、祈願所の法印様を請じて疱瘡安全のご祈祷をさせた。その神棚には親戚や懇意から見舞いとして贈られた江戸絵を貼る。それを御棚あげといった。こうして4日目になると、中行といって又法印様を喚んで来て祈祷をする。この時村の若者組を招いて酒肴を振る舞い、御棚ばやしといって神様の機嫌を損ぜぬ様に、賑やかに囃し立ててもらう。7日目に御棚おろしをする。軽い疱瘡の時には自分の方でも早く済むようにと、其幣を買って行く人が多かった。紫疱瘡は重いとて紫を忌み赤色は縁喜に用いたもので、赤い頭巾を子どもに被せ、又疱瘡安全の御守護の札なども赤字であった。疱瘡の経過も軽く済んだときは、時節を見て親戚懇意村の若者組を招待して、酒と餅とを振る舞って痘(モ)流しの祝をした。文久2年の8月筆者の伯母マス女が、7歳のに此祝をしたのが村では最後で、それ以後は追々種痘が行われ始めて、祝をしなくなった。痘流しの餅は千本杵で歌を歌いながら賑やかに面白く搗くものであった。」と報告されている。

(52) 「遠州横須賀より」『郷土研究』第3巻第7号、1915

(53) 話者：1944年生まれ、2012年筆者調査

- (54) 話者：1928年生まれ、2013年筆者調査
- (55) 話者：1927年2月10日生まれ、1927年7月5日生まれ、2013年筆者調査
- (56) 永井建「疱瘡神のこと」『民族』第3巻第5号、1928

参考文献

- 松下石人『三州奥郡産育風俗図絵』1937、正文館書店、(国立国会図書館デジタルコレクションにて閲覧)
- 富士川游『日本醫事年表』1941、醫事公論社
- 伴忠康『適塾をめぐる人々—蘭学の流れ—』1977、創元社
- 伴忠康『高松凌雲と適塾—医療の原典—』1980、春秋社
- 山本俊一『日本コレラ史』1982、東大出版会
- 伴忠康『医学のあゆみ—日本の医学教育によせて』1984、創元社
- 伴忠康『適塾と長与専斎—衛生学と松香私志—』1987、創元社
- 小野芳朗「〈清潔〉の近代—「衛生唱歌」から「抗菌グッズ」へ—」1997、講談社
- 外川幹夫『医療福祉の祖長与専斎』2002、思文閣出版
- 新村拓『日本医療史』2006、吉川弘文館